

序 章 本研究の目的と視点	11
第一章 『古活字版日本書紀抄』の自問自答表現——講義という表現空間——	15
一 はじめに	15
二 自問自答表現とは	16
三 『古活字版日本書紀抄』の用例分析	19
四 応答詞「ア、」 「アウ」の性格	30
五 天文五年講本と『日本書紀抄』の場合	33
六 おわりに	41
第二章 「ア、」「アウ」型自問自答表現の分布をめぐって	53
——吉田兼俱系日本書紀抄の場合——	53
一 はじめに	53

二	吉田兼俱系日本書紀抄諸本について……………	54
三	文明九年景徐聞書の場合……………	54
四	文明十三年景徐聞書の場合……………	61
五	月舟聞書の場合……………	66
六	おわりに……………	68
第三章 「ア」、「アウ」型自問自答表現の分布をめぐって		
	——清原宣賢系『毛詩抄』『蒙求抄』『論語抄』などの場合——	78
一	はじめに……………	78
二	『毛詩抄』の場合……………	78
三	『蒙求抄』の場合……………	95
四	『論語抄』の場合……………	102
五	清原業忠講『論語聞書』の場合……………	110
六	和仲東靖抄出・卷子本『日本書紀抄』の場合……………	113
六・一	卷子本『日本書紀抄』における「ア」、「アウ」の用例……………	114
六・二	卷子本『日本書紀抄』の用例分析……………	122
七	おわりに……………	131

第四章 『古活字版日本書紀抄』の敬語表現——素材への表現・聴講者への表現——		
一	はじめに……………	143
二	敬語の分類……………	144
三	『古活字版日本書紀抄』における敬語表現の実態……………	145
三・一	尊敬表現の実態……………	145
三・二	謙讓表現の実態……………	164
三・三	丁寧表現の実態……………	168
四	おわりに……………	170
第五章 別視点から見た『中華若木詩抄』——表現者如月寿印の意図——		
一	はじめに……………	181
二	『中華若木詩抄』の研究史と問題の所在……………	182
三	『錦繡段抄』『続錦繡段抄』『花上集鈔』における「絵画」との接点……………	184
四	『中華若木詩抄』における「絵画」との接点——「詩画一体の眼」へ……………	188
五	寛永十年中野道伴刊行『中華若木詩抄』の意図と意義……………	192
六	『本朝詩仙註』の成立と『中華若木詩抄』……………	200
七	『中華若木詩抄』の特質——狩野一溪『後素集』との比較を通して……………	205

八 おわりに……………

218

第六章 『中華若木詩抄』の表現構造——「竹」の詩をめぐって——

220

一 はじめに……………

220

二 「南十二間、竹色々か、せられ」(『信長記』)

220

——「色々」という表現にこめられた「室町ごころ」を抄物に探る……………

221

三 『錦繡段抄』における「竹」の詩と表現……………

223

四 『統錦繡段抄』における「竹」の詩と表現……………

226

五 『花上集鈔』における「竹」の詩と表現……………

227

六 『中華若木詩抄』における「竹」の詩と表現……………

231

六・一 謙岩「水竹佳処」江西「竹間芍薬」天隱「稚竹可人」詩より……………

231

六・二 虞伯生「聽雪軒」仲芳「夢山居」詩より……………

235

六・三 江西「題画」彭復「臨川道中」王兼「梅花」張蒙「一逕」詩より……………

236

六・四 徐淵子「偶題」、および、蘇東坡「竹」(一〇七九年作)詩より……………

238

七 おわりに……………

241

第七章 『中華若木詩抄』と評語「アリアリト」——表現を測定する——

245

一 はじめに……………

245

二 『中華若木詩抄』の評語「アリアリト」——如月のいう詩作の極意……………

247

三 「アリアリシク言イ出ス」「アリアリト作り分クル」……………

255

四 「自然ニキコヘテ妙」「如在眼中」……………

257

五 「ソノマ、画カイタヤウニ」……………

260

六 「思ヒノマ、ニ」「言外ニアラワレタリ」……………

263

七 おわりに……………

266

第八章 「テノ用ハ」の表現領域——抄物から狂言まで——

272

一 はじめに……………

272

二 吉田兼俱系日本書紀抄諸本・清原業忠講論語聞書……………

272

・史記抄・漢書列伝竺桃抄の場合……………

272

三 清原宣賢『日本書紀抄』(後抄本)における「テノ用ハ」の言語的背景……………

280

四 清原宣賢系抄物(毛詩抄)・蒙求抄(論語抄)の場合……………

282

五 (中華若木詩抄)・(四河入海)の場合……………

286

六 中世諸文献を調査する……………

290

——大藏虎明本狂言の状況から「テノ用ハ」の発生史まで……………

290

七 おわりに……………

299

第九章 「不審」という語の表現環境——狂言に反映された日常会話(一)——

- 一 はじめに……………304
- 二 『中華若木詩抄』における直訳・意識の「不審」と原文……………305
- 三 大藏虎明本狂言における「不審」(一)……………311
- 四 大藏虎明本狂言における「不審」(二)……………321
- 四・一 <ふしんな><ふしんなよ>……………321
- 四・二 <ふしんな事じや>……………326
- 四・三 <ふしんにいぢる><ふしんぢいぢる>……………329
- 四・四 <ふしんなり>……………333
- 四・五 <ふしんな…><ふしんなる…>……………334
- 四・六 <ふしん尤><ふしん尤>……………335
- 四・七 <ふしん(が)ある>……………340
- 四・八 <ふしん(を)する>……………341
- 四・九 <ふしんをなす>……………346
- 四・十 <ふしんな事を申す><ふしんに思ふ>……………348
- 四・十一 <ふしんがはれる><ふしんがはれぬ><ふしんをはらす>……………349
- 五 おわりに……………353

第十章 「不審」という語の表現環境——狂言に反映された日常会話(二)——

- 一 はじめに……………361
 - 二 大藏虎明本狂言における「きどくな」と「不審」……………361
 - 三 大藏虎明本狂言における「ふしぎな」と「不審」……………374
 - 四 大藏虎寛本狂言における「不審」——大藏虎明本狂言との対照研究……………380
 - 四・一 「不審ぢや」について……………382
 - 四・二 (a) 「大藏虎明本狂言との共通曲番のうち、虎明本に「不審」の例がある曲」の場合
——実例と解釈……………382
 - 四・三 (b) 「大藏虎明本狂言との共通曲番のうち、虎明本に「不審」の例がない曲」の場合
——実例と解釈……………408
 - 五 おわりに……………416
- 第十一章 「不審」という語の表現環境——『エソポ物語』・御伽草子などの場合——
- 一 はじめに……………422
 - 二 『天草版エソポ物語』の「不審」……………423
 - 二・一 「たがいに不審の勅札を送り」——謎々・謎解きの世界……………423
 - 二・二 「エヂットよりの不審の条々」……………426

二・三 「それが不審ぢや」……………	429
三 『天草版へイケ物語』の「不審」……………	434
四 御伽草子の「不審」……………	440
四・一 A群における「不審」……………	441
四・二 B群における「不審」……………	450
四・三 御伽草子の「不審」まとめ……………	454
五 仮名草子『伊曾保物語』の「不審」……………	454
六 仮名草子『醒睡笑』の「不審」……………	463
七 おわりに……………	475
第十二章 『日葡辞書』の「婦人語」から——性差による表現の実態——	487
一 はじめに……………	487
二 『日葡辞書』の「婦人語」の実態……………	488
三 『日葡辞書』の「婦人語」の分析……………	496
三・一 正篇と補遺篇で重なりのある語について……………	496
三・二 正篇内部で重なりのある語について……………	497
三・三 補遺篇内部で重なりのある語について……………	498

三・四 補遺篇で、補われた語の性格等について……………	498
三・五 正篇・補遺篇通して言及したい語彙……………	522
四 おわりに……………	531
第十三章 みもなき事・いとふ・心のやみ・くはんねんする	538
——『こんてむつすむん地』の用語と表現——	538
一 はじめに……………	538
二 世界・みもなき事・いとふ……………	539
三 したふ・閻路・閻・寿命・いのち……………	545
四 心のやみ・ひかり・行跡・ことば・語・すすむる……………	549
五 くはんねんする・がくもん……………	555
六 おわりに……………	565
第十四章 天の甘味・甘露・値遇・ひとしく	573
——『こんてむつすむん地』の用語と表現——	573
一 はじめに……………	573
二 至る・立入る・天の甘味・甘露……………	573
三 甘味と甘露——重点調査……………	576

四 しかるに・善の望み・ほつき……………588

五 あぢはふ・値遇・分別……………592

六 進退・ひとしく……………595

七 おわりに……………598

第十五章 へりくだり・ちりんだあで・ただしき人
——『こんてむつすむん地』の用語と表現——……………606

一 はじめに……………606

二 へりくだり・ちりんだあで・なにのゑきざ……………606

三 こびたることば……………613

四 善人・ただしき人……………615

四・一 日本側の文献における「正し」とその周辺の語……………617

四・二 『こんてむつすむん地』の「正し」とその周辺の語……………625

五 おこなひ・行儀・あはせ奉る……………631

六 おわりに……………633

終 章 ま と め……………639

あとがき……………658

索引 (i 人名索引 ii 書名索引 iii 語句・事項索引)……………661

序章 本研究の目的と視点

中世——室町時代～戦国時代～江戸初期の言語を反映する国語資料である抄物資料・キリシタン資料・狂言資料については、すでに私の範囲内の資料的考察、語彙的・国語史的考察を試みることができた(平成四年五月清文堂刊『日本書紀抄の国語学的研究』・平成六年十一月武蔵野書院刊『中世のことばと資料』)。

本研究では、前二著を踏まえて、それらの文献が生み出される表現の現場を推察し、あるいは、ことばをつむぐ表現者の意図、そしてその結果としての表現性などについて考察を加えることにしたい。また、口語という側面も考慮して、ある表現の使われる表現環境(コミュニケーションとしての現場)などにも考察を及ぼしたい。本研究の題目となっている「中世文献の表現論的研究」の「表現論的研究」とは、そのような考察を総合的にさすものであり、単に、「自問自答表現」「敬語表現」「性差による表現」などの「表現」を対象としたものであることを示すものではない。「中世文献の表現研究」ではなく、「中世文献の表現論的研究」であるのも、このためである。

具体的にとりあげる文献は、

- 第一章 『古活字版日本書紀抄』をはじめとする清原宣賢系日本書紀抄諸本
- 第二章 吉田兼俱系日本書紀抄諸本
- 第三章 清原宣賢の関わる『毛詩抄』『蒙求抄』『論語抄』・清原宣賢に先立つ成立である清原業忠講論語問書・清原宣賢の没後に成立した両足院藏卷子本日本書紀抄

第十二章では、『日葡辞書』の「婦人語」を発端に、『醒睡笑』や狂言・御伽草子・太閤秀吉文書などに「女房ことば」としてのそれを求め、女性特有語の表現の実態とその普及の様相を把握しようとする。女房ことばは、ある面では、女性が文化を創ってきたつまかさね（歴史）でもあるので、現代にも通じる「女性と文化」という視点も導入する予定である。

第十三章、第十五章の主資料である『こんてむつすむん地』は、国字で記されたキリシタン資料の一つであるが、ローマ字表記された『コンテムツスムンヂ』と密接な本文関係を有し、この二つを対照させて両者の表現のくいちがいを言及していくなかで、当時のキリシタン信仰（思想）やキリシタン文学の目ざした「心」をつかみとることができると考えている。また、『こんてむつすむん地』に使われた用語や表現を、当時の日本側のことばや古典文学といわれるものの中に関連を求め、そのことばや表現が訳語として選ばれた背景をさぐると思う。その際、言語文学・異文化交流論の視野をも導入したいと考えている。

「表現論」「表現学」と言えば、『国語年鑑』の載録論文名を見ても多岐にわたり、時に、文学との境界があいまいなものも存在する。しかし、本研究では、資料的考察、語彙的・国語史的考察ではその文献の有する言語行為としての表現性が十分に掴めないと考えられたテーマを扱っているので、曖昧性は排除されたのではないかと考えているが、本書における表現論的研究が、文学の面でも評価されることがあるならば、応用国語学の一分野としてうれしいことであると思う。そして、何よりも、資料——個々の文献が読みこむ角度によって生き生きとした言語空間を現出し、今ある我々の会話のように動的な表現分析が可能であることを示すことができたら幸せである。

第一章 『古活字版日本書紀抄』の自問自答表現

——講義という表現空間——

一 はじめに

『古活字版日本書紀抄』（二冊本。第二冊目末に「於洛陽本能寺前町開板」の刊記を有する^{〔注1〕}）と、その重要な異本である建仁寺両足院蔵『神代上下抄』（二冊）、およびその他の異本・関連本については、すでに、

・吉田兼俱の日本書紀抄について——兼俱自筆本の成立と幻抄——（『抄物研究』第一号 昭和五十年十月（私家版）のち、清文堂刊『日本書紀抄の国語学的研究』第一部第一・第一章に所収「拙稿1」と称す）

・清原宣賢系日本書紀抄諸本の基礎的考察——〈先抄本〉を中心に——（『抄物研究』第二号 昭和五二年二月のち、『日本書紀抄の国語学的研究』第一部第二章に所収「拙稿2」と称す）

・両足院蔵『神代上下抄』補記の性格（『国語国文』昭和六十年十二月号）のち、『日本書紀抄の国語学的研究』第一部第二・第三章に所収「拙稿3」と称す）

・両足院蔵日本書紀抄 解説Ⅱ 和仲東靖筆『神代上下抄』（昭和六一年一月臨川書店刊『両足院蔵日本書紀抄』のち、『日本書紀抄の国語学的研究』第一部第二・第二章に所収「拙稿4」と称す）

・『古活字版日本書紀抄と両足院蔵神代上下抄』——待遇表現に関する語の相違——（『近代語研究』第七集 昭和六二